

小・中学生の学級適応感に関する研究

－自己肯定感および時間的展望との関連から－

野 上 彩

【問題と目的】

不登校やいじめ・校内暴力など、学校生活における不適応問題が早急に対応を求められる課題となって久しい。しかし、不登校の児童生徒数や校内暴力の発生件数が増加傾向にあることから、学級不適応の問題を理解することは困難であり、対応に苦慮しているというのが現状であろう。自己肯定感および時間的展望は、学級適応感と密接に関連し、思春期において発達の重要な概念として挙げられる。そこで、学級適応感とこれらの関連性を明確にすることで、児童生徒の学級適応感についてのより深い理解につながると考えられる。よって、本研究では、小・中学生の学級適応感を自己肯定感および時間的展望の関連から検討することを目的とする。

【方法】

調査協力者：大阪府 X 市の公立小学校 5～6 年生 1262 名（男子 625 名、女子 637 名）、中学校 1～3 年生 1834 名（男子 935 名、女子 899 名）の合計 3096 名であった。

調査時期・手続き：2008 年 5 月下旬から 7 月上旬に質問紙調査を実施した。

質問紙の構成：学級適応感尺度（Q-U）、自己肯定感尺度、時間的展望尺度で構成された質問紙を使用した。

【結果と考察】

学級適応感尺度の得点から 4 群に分け、4 群を独立変数、自己肯定感および時間的展望をそれぞれ従属変数として分散分析を行った。その結果、学級満足感が高い群のほうが低い群よりも自己肯定感および肯定的な将来観は高いということが明らかになった。また、満足感が高いだけでなく、学級内で承認されていると認知している群のほうがそうでない群よりも自己肯定感および肯定的な将来観が高いということが示された。よって、クラスメイトと関わりがあり、学級内で承認されていると感じることが、学級適応感に影響を与え、自己肯定感の高さや将来への明るい見通しをもつために重要であると考えられる。

また、自己肯定感および将来観は中学校 1 年生で大きく低下することが示され、中 1 ギャップが浮き彫りになった。さらに、自己肯定感においては、女子のほうが低いという性差が明らかとなったことから、それぞれの発達段階や性別に応じたアプローチの必要性が示唆された。今後、より具体的な援助方法を検討し、不適応予防につなげていくことが必要であろう。